

コロナ禍での在宅復帰に向けた取り組み

～住み慣れた家に帰りたい(離島編)～

施設名：介護老人保健施設 おきなわ徳洲苑

発表者：渡具知 充 支援相談員

宮平真由美 介護支援専門員

呉屋 竜太 理学療法士

【はじめに】

当介護老人保健施設(以下、当老健)は平成 30 年 6 月より超強化型となり、在宅復帰を支援している。現在、コロナ禍で外部関係機関やご家族を含めて連携が困難となっている。今回、離島より急性期病院へ入院となり、その後、当老健へ入所になった N 氏に、生活動作の自立に向けた訓練や介護を行い、在宅復帰に向けた取り組みの経過報告を行なう。

【事例紹介】

〈生活歴〉

N 氏(94 歳)は I 島に 8 人兄弟の長女として生まれ、結婚後に商店を経営。子は三男二女の 5 人。夫と 2 人暮らしであったが 9 年前に夫が他界、以来独居。令和元年 7 月より介護保険サービス利用開始。要介護 1 の認定。

〈傷病名〉左尿管結石、結石性腎盂腎炎、腹部大動脈瘤。

〈生活機能低下の原因となった経過〉

令和 3 年 11 月初旬、ヘルパー訪問時、寒気の訴えあり、I 診療所受診。結石性腎盂腎炎、敗血症と診断され、ドクターヘリで C 病院へ救急搬送。11 月中旬、当老健へ紹介入所。

【入所後の経過】

〈食事〉全量摂取。(アチビー、きざみ食)

〈移動〉車いすを使用し軽介助。

〈入浴〉シャワーチェアを使用して一部介助。

〈排泄〉下衣動作介助。セルフケア不十分さあり、一部介助や見守りを行なっている。日中は訴え時、定時トイレ誘導を行う。夜間は尿パット 800 で対応。朝のトイレ誘導にて殆ど失禁されることはない。

〈意思疎通〉受け答え可能。HDS-R 5/30。

【在宅復帰に向けた取り組み】

入所後 2 か月を経過。コロナ禍で面会も制限しているため、本人の動画を見ながら担当 PT より現況説明。ベッドからの起き上がりは自己にて行えている。立ち上がり→C-P U Wにて歩行 20m→方向転換して座れる。

〈ご意向確認〉

本人「自分の島へ帰りたい。」

ご家族「以前、自宅で過ごしていた状態と同じです。こんなに良くなっているなんて、家で過ごせそうですね。有難うございます。家では買い物カートのような押し車を使用していましたが、それも使えますかね？」

〈自宅の状況確認〉

本来であれば環境確認で退所前訪問を行うところだが、離島またコロナ禍で行えないため、ご家族に自宅の動線(階段やトイレ、生活の場)を写真・動画で撮影して頂いた。

後日、ご自宅の動線を動画で確認。自宅が外階段の 2 階にあり、屋内は押し車を使用し移動されていた。入所当初は階段昇降を望まないとは伺っていたが、本人の状態もいいので訓練に階段昇降、また押し車で移動を取り入れる。リハビリの進捗状況を確認しながらキーパーソンの娘へ報告を行う。またケアマネジャー同士の情報提供もその都度行い、退所後の介護保険サービスの調整を行なった。階段昇降、押し車で移動も可能となり、その動画をご家族に見てもらい、在宅復帰の取り組みから 1 か月後、自宅へ退所となった。

【取り組みを実践した結果】

動画・写真を通して、住宅環境をイメージしそれに向けた訓練を行うことができた。またコロナ禍で面会ができない中、本人とご家族の意思確認をその都度行い、電話やタブレットなどでお話もして頂いた。離島の為、離島のご家族と本島内のご家族の情報共有も行ない、支援に繋げていった。

【まとめ】

コロナ禍でご家族との面会中止、外部機関との連携も支障がある中、住み慣れた離島へ無事、退所支援を行うことができた。今後もこのような在宅復帰の支援は必要になると想定される。離島や遠方であっても住み慣れた環境に帰れるよう支援していきたい。